

キヤンデイス・オーウエンズ著

『ブラツクアウト』（方丈社）を読む

石川 弘 修

（元読売新聞編集局総務・元読売アメリカ社社長）

副題に「アメリカ黑人による、民主党の新たな奴隷農場からの独立宣言」とあるように、アメリカの民主党の福祉政策に取り込まれ、自立できない黑人の覚醒を訴える政治評論家、黒人女性の著書である。「ブラツクアウト」は本来、停電、停止などを意味するが、左派、リベラルメディアが作り上げた「黒人差別」というシナリオをまずボイコット、

黒人が被害者意識に囚われている「奴隷農場」から脱出しなければならぬ、とする二重の意味を込めている。黒人で、女性の保守派からの告発とあって、アメリカでは一時ベストセラー・リストにも入った。日本では二〇二二年四月下旬に翻訳本が発売されたものの、人種問題が身近な問題でないこともあって、認知度が今一つ。だが、著者は黒

人問題を通して過激になったアメリカの左翼、リベラリズムや民主党の福祉政策、さらにリベラルなメディアの偏向を鋭く抉っており、日本でも強まっている左派、リベラルの波に対する警告となっている。我那覇真子訳、福島朋子共同訳、ジェイソン・モーガン監訳も分かりやすい。

●福祉は充実したが…

著者は、まず、リンドン・ジョンソン大統領が署名した「一九六四年の公民権法」と「一九六五年の投票権法」を境に、アメリカの黒人は抑圧されていた時代に別れを告げ、自由と可能性を追求するアメリカン・ドリームの世界

に足を踏み入れることになっていくはずだったが、必ずしもそうはならなかった展開を取り上げる。現実には、ジョンソン大統領の「偉大な社会」以降の貧困層に対する政府給付金など福祉政策の充実にもかかわらず、白人との格差を縮めることはできなかった。それどころか、シンクタンクの米経済政策研究所（EPI）が二〇一八年、黒人の置かれた生活環境を六〇年代のジョンソン時代と対比した調査によると、(1)教育環境は格段に向上したが、白人との教育レベルには依然差がある (2)黒人の失業率は白人の約二倍、貧困率は白人の二・五倍である (3)黒人の住宅所有率は四十%強で、白人とは三十ポイントの差がある (4)黒人受刑者はこの五〇年の間に三倍増え、白人受刑率の六倍以上となっている。

「民主党は、さらなる法律、より大きな連邦政府や国家権力の関与が答えだと強調するが、それは間違いだ。米社会の構造的抑圧からくる問題ではない。私たち自身が解決しようとする限り、非効率で国民の軛になっている政府に解決できるはずがない。黒人が被害者意識を捨て去らなければならぬ」。著者の答えは明快だ。

黒人が抱える最大の重荷は、黒人の七十五%が父親不在

で育っていることだ。この事実、低所得に陥る可能性や、犯罪率、検挙率の高さなどあらゆる面で黒人社会に悪影響をもたらしている。政府の統計によると、一九六三年には非白人の七十二%の家族が結婚して一緒に暮らしていた。しかし、二〇一七年になると、その数字がほぼ逆転して、結婚している黒人世帯のわずか二十七%になってしまった。五十四年の間に、結婚して一緒に暮らしている黒人家族の割合は四十五ポイントも落ち込んでいる。一方、結婚して一緒に暮らしている白人家庭の割合も八十九%から三十八ポイントも落ち込んだが、それでも五十一%（二〇一七年）を維持している。もう一つの驚くべき統計は、黒人の未婚男性の多さだ。一九六〇年、十五歳以上の未婚白人男性は二四・四%、黒人男性は三三・一%だったが、二〇一七年になると、白人男性未婚率三三・一%に対し、黒人男性のそれは五一・九%と二十ポイント近い差が生じている。

これは、黒人家庭の父親不在率の高さにもつながってくる。黒人で、ラジオ番組の司会者、作家であるラリー・エルダーによれば、家庭における父親不在は、人生での失敗を予測する最大の指標だと指摘する。シンクタンクのブル

ツキングス研究所の報告によれば、シングルマザーに育てられた子供は、学校での成績、社会性や情緒の発達、健康、仕事での成功など、人生における様々の場面で、悪い結果を出す傾向にある。特に、子供の実際の父親ではないボーイフレンドと同棲中の母親の家庭では、虐待や育児放棄にあって危険性、子ども自身が十代の親になる可能性、そして高校や大学を卒業できない可能性が高い。さらに、父親のいない家庭で育った黒人の子供たちは、自身が成長した時に、自分が生まれ育った環境をそのまま再現する傾向がある。そのため、政府は将来的に何世代にもわたって、父親のいない黒人の子供たちの保護、教育の必要性に迫られることになる。

黒人に力を与え、白人と黒人の間の貧富の差を埋めるために行われたはずの政府、特に民主党政権の福祉重視政策は、黒人や貧困家庭に「魚を与えることはしても、魚を釣る方法を教えなかった」。この結果、実際には逆に貧富の差をさらに広げただけでなく、国庫に多大なる負担をかけることになった。福祉は、国家予算の中で最大の支出であり、年間一兆ドルを費やしている。日本も例外ではない。予算のほぼ三分の一をしめる最大支出である。福祉政策の

背景には、ジョンソン大統領が側近に漏らしたように「自分の間、黒人票を取り込める」という民主党の政略がある、と著者は指摘する。

● 「人種差別が黒人犯罪増に」は虚構

黒人に対する、警察の残虐行為には人種差別がある、とリベラル・メディアは批判する。しかし、黒人で、ラジオ番組の司会者、作家であるラリー・エルダーは、「リベラルが作り上げた物語だ」ときっぱり否定する。エルダーによると、シカゴでは殺人事件の七十%が黒人同士の殺し合いだという。最近、年間で九百六十五人が警官に撃たれたが、そのうち白人警官が武器を携行していない丸腰の黒人を撃った事件は四%に過ぎなかった。

二〇二〇年五月、ミネソタ州で黒人、ジョージ・フロイドが白人警察官に殺害された事件は、日本でもテレビなどで広く報じられたが、実体はBLM（ブラック・ライブズ・マター、黒人の命は大切だ）などの運動家とメディアが一体となって極端な物語に仕立て上げたものだ。携帯電話で録画され、インターネットで流された場面は、警察官の膝

で首を地面に押さえつけられたフロイドが「息ができない」と訴えている。数分後、救急車で搬送されるが、その後死亡が確認された。警官の対応が全米で問題となり、事件の四日後という速さで警官は逮捕された。BLMやAntifa（アンティファ、反ファシストや反人種差別主義の左翼政治運動）などの活動家グループは、事件の舞台となったミネアポリスで暴動を起こし、町は火の海となった。全国の運動家が呼応し、全国の主要都市が火に包まれることになった。この騒動の中で、フロイド自身がドラッグの常習者で、マイノリティ社会を脅し続けてきた犯罪は、かき消された。事件当日も、フロイドはモルヒネの五十〜一〇〇倍の効力を持つフェンタニルを摂取していた。命取りになりかねないドラッグだ。押さえつけられる前から「息ができない」と言っていた姿がビデオに映っている。こうした事実があるにもかかわらず、左派・リベラルなテレビ、新聞はフロイドをアメリカ黒人のヒーローに祀り上げた。一方で無視されたのが、セントルイス警察を退職、質屋の警備を担当していた七十七歳の黒人、デビッド・ドーンが殺害された事件だ。町の暴動で担当の店が略奪されているのを知り、出動したが、すでに店内にいた黒人強盗に撃たれ、

死亡した。運動家やメディアが無視したのは、「黒人が黒人に殺さるのは珍しくないからだ」という。フロイドがアメリカ黒人のヒーローとして多くのメディアで祭り上げられる一方で、立派に生きてきた老人のドーンは、メディアから無視され、警察への反感が強まる中で打ち捨てられた。このメディアの不当な差別こそ著者の怒りに火をつけ、執筆に駆り立てた動機の一つであると、著者は述懐している。その後、民主党指導者たちは警察予算の削減に動き、実際、ワシントン州シアトルやオレゴン州ポートランドでは二〇二〇年、予算削減措置を取った。しかし、逆に町の治安が乱れ、犯罪が増加するのを目にして、予算復活措置が取られているという。

●魔女狩り化するフェミニズム運動

男女間の機会均等を求めて、つつまじやかに始まった「フェミニズム」運動は、その後意味が変わってしまった。今や左翼のおもちゃであり、現代のフェミニズムは、すべての男性に対する魔女狩りの前触れのようになった。二〇一八年以降、セクシャル・ハラスメントの体験を共有

する。#MeToo。(私も、を意味するハッシュタグを付し

たSNS用語)運動に火が付き、左派は国民をフェミニストと反フェミニストに二分するのに全力を尽くしてきた。

左派の魔女狩りの対象になったのが、二〇一八年七月、トランプ大統領から連邦最高裁判所陪席判事に推薦されたブレット・マイケル・カバノー氏だ。一九八二年の夏、十七歳だったカバノー氏は、あるホームパーティに招かれ、そこで出会った当時十五歳の女性に対し、カバノー氏が、暴力行為を働いたとの告発を受けた。結局、告発は証明されずに終わったが、告発した女性は民主党員であり、左派運動家としてカバノー氏を貶め、連邦最高裁判事指名をつぶす強い動機があった。

フェミニズム、ジェンダー、人種差別などがリベラル過激派の政治目的に悪用されると、すべての問題の責任は外部にあり、個人の努力や責任は棚上げとなる。この著書の中で、オーウエンズ氏は大学在学中に犯した自らの過ちを告白している。限界を越した飲酒のため、素面なら絶対関わらない男性と関係をもってしまった。#MeToo運動が広がっていたら、自分も被害者だと申し立てていただろう。時代が違っていたのが幸いだったのか、自らの非を認める

ことが出来た、と著者は振り返っている。

●メディアに振り回されるな

トランスジェンダー推進の運動は、子どもに自分の性を選ばせようとしている。生物学は嘘として、男は女になれるし、女は男になれると唆している。子供が手術を受け、自分の身体を切断する事態まで引き起こしている。大人はテレビを見て誑かされ、親たちは公認しているが、この推進派の運動は本当に行き過ぎである。ゲイ、レスビアン、バイセクシャルの存在自体は問題とは思わないが、イデオロギーとして広めることは別で、大問題だ。子供たちにとランスジェンダーになることをクールだと吹き込んだり、漫画に入れてみたりする。昔からあるセサミストリートは、「この登場人物はゲイでした」として、過去のエピソードを書き換えたりするが、これは過激派の隠された意図と思われる。

アフアーマティブ・アクションに端を発して、その後過激な運動に拡大、発展したポリコレ(ポリティカル・コレクトネス)、そしてwokness(ウォークネス、目覚めた

高い意識)等々、次々と繰り出される過激なりべラル運動には、さすがに民主党穏健派も愛想が尽きたのか。今や伝統的な民主党員には行き場がなくなり、「難民化」が始まっている、と著者は指摘する。

著者に映るのは、人生をメディアが描いたシナリオ通りに歩まされている人が多いことだ。人生の道筋に誰かがあらかじめ灯りを灯して、ああしろ、こうしろ、と誘導している。メディアによるシナリオを、この「偽の灯り」をまづ消して、「ボイコット」する必要がある。そして、特に標的とされている黒人は、ここから脱出しなければならぬ。世界に対して受け身で生きるのではなく、自分が世界に対して能動的に関わって生きなければ、と訴える女史。言ってみれば、「自分の人生の運転席には自分が座っている、と自覚するところからどんだん力が湧いてくる」と著者は力説する。

一九八九年生まれの人女性活動家は、シンクタンクや大学、或いはネットでの討論活動を通して過激化したリベラルな社会運動や主流メディアに対する批判のトーンを一段と強めている。社会潮流の潮目の変化をもたらすかもしれない。

(丁)